

Alphonse Mucha Museum News

堺 アルフォンス・ミュシャ館 (堺市立文化館)



Contents

展示報告 (2018年3月-2019年3月)
作品紹介
イベントレポート
ミュシャ館インフォメーション
主な作品修復報告

vol. 8

アルフォンス・ミュシャ
《メディア》
1898年
リトグラフ、紙

ミュシャと新しい芸術 アール・ヌーヴォーと ミュシャスタイル

2018年3月17日(土)ー7月8日(日)

淡 淡い色合いの花々に囲まれた優美な女性やしなやかな曲線……アルフォンス・ミュシャはその繊細で優雅な画風によって現在も人気のある画家です。本展覧会ではミュシャの作品が人々を惹きつける魅力の秘密を「女性」、「自然」、「産業と芸術」の視点から計77点の作品でご紹介しました。

アール・ヌーヴォーとは19世紀末から20世紀初頭にかけてヨーロッパ各国でほぼ同時に起こった大規模な芸術的潮流で、自然を取入れ、しなやかな曲線を用いて作品の装飾性を高めました。第1章ではこのアール・ヌーヴォーを代表する芸術家であるミュシャの画業各時期の作品を紹介しました。ミュシャは現在のチェコ共和国に生まれ、1895年から約10年間フランスのパリを中心に、植物や女性をモチーフにした流麗な曲線で作品を描き、これらの作品は「ミュシャ・スタイル」と呼ばれて大流行しました。その後ミュシャはアメリカ滞在を経て、チェコに帰って祖国のために多くの作品を制作しました。

アール・ヌーヴォーが流行し、ミュシャが活躍した19世紀末のフランスでは、フェミニズム運動の推進などによって女性の社会進出が少しずつ始まっていました。このような時代の流れの中で、アール・ヌーヴォーの芸術において女性は恐るべき存在として描かれ、また反対に理想的な女性像としても表されました。第2章ではミュシャがパリで描いた女性像をポスターや装飾パネルを中心にご紹介しました。ミュシャは神話に出てくる女神のような女性を描いて商品を魅力的に宣伝し、また一方では、当時流行した男性を破滅に導くファム・ファタルを題材にした女性像も描きました。

アール・ヌーヴォーの芸術家たちは日常的な自然の

中にあるものを参考にして新しい芸術を作り出すことを目指しました。ヨーロッパでは人間の存在を中心にした考え方が根底にあり、それは芸術作品が人間をテーマの中心として扱っていたことにも表れていま

した。しかしアール・

ヌーヴォーの芸術家たちは、日常的な自然を主題にする東洋の自然観に影響を受け、自然を中心のテーマとして作品を制作しました。第3章では、ミュシャが植物を徹底的に観察して写實的にスケッチし、それらをデザイン化した作品を、『装飾資料集』の中からご紹介しました。

産業革命以降、大量生産と消費が始まったヨーロッパ社会ではポスター芸術が発達します。またミュシャがデザイナーとして活躍したフランスでは、国を挙げて自国の産業製品の芸術的価値を高めようとする動きが高まりました。第4章では、ミュシャによる宣伝ポスターや装飾品に応用された作品を中心にご紹介しました。ミュシャは若い頃から歴史画家になることを希望していましたが、パリで美術学校に通うための資金援助が打ち切られ、その後はポスターや商品パッケージなど、数々の商業デザインの仕事をを行いました。またミュシャのデザインはタペストリーや皿など室内を飾るための装飾芸術品にも使用されました。

このようにミュシャは19世紀末のフランスの社会・芸術的背景と関わりながら、アール・ヌーヴォーを代表する数多くの作品を手がけました。そしてその作品は現在も国を越えて人々を魅了し続けています。(Y.K.)



物語を彩るミュシャと挿絵の世界

2018年7月14日(土)ー11月11日(日)

物 語に寄り添う挿絵は文章に親しみをもたらします。読者の想像力を刺激し、時には少しの息抜きを提供してくれるでしょう。華やかな女性像が描かれた商業ポスターを手掛けたことで広く知られているアルフォンス・ミュシャですが、活動初期のころから生涯にわたって多くの挿絵を手掛けてきました。本展覧会では、ミュシャが彩る物語の「挿絵」について注目し、ミュシャの個人コレクターである尾形寿行氏のコレクションから書籍や雑誌などに表された初期から晩年までの作品を紹介しました。

第1章ではパリで流行作家になる以前の若きミュシャが活動初期に手掛けた書籍の挿絵を中心に紹介しました。画家になることを夢見ていた若きミュシャは、親交

があったクーエン＝ベラシ伯爵の援助のもとパリの美術学校に通い絵の勉強に励みます。しかし、不幸なことに突如としてその援助が打ち切られたミュシャはアカデミーを退学せざるを得ず、食べるものにも困窮します。若きミュシャは生計を立てるために書籍の挿絵制作の仕事に就きました。女優サラ・ベルナルとの運命の出会いがアルフォンス・ミュシャにとって人生の大きな転機となりましたが、ミュシャがサラと出会う以前にパリで活動していた初期のころは主に挿絵画家として生計を立てていました。

ミュシャが挿絵画家として生計を立てていた初期のころ、しばらくしてパリの著名な出版社であるアルマン・コラン社から書籍『白い像の伝説』の挿絵を描く依頼が舞い込みます。第2章ではそれらの挿絵を前後期で入れ替え、それぞれのエピソードとともに紹介しました。ミュシャの初期の創作活動の中でも完成度の高い作品のひとつとして位置づけられる書籍『白い象の伝説』は、全盛期に描かれたポスター作品と比べると特に繊細で精緻な

筆致にその特徴を見出せます。しかしながら初期にみられる写実的な描写はそのままに、本作品中には丸や四角等の図形を挿絵に取り込むデザイン的要素が新しくみられ、後のミュシャのポスター作品を予感させるかのようです。著名であったアルマン・コラン社からの依頼はすなわち、ミュシャが挿絵画家として確かな技量をそなえつつ、ある程度名が知られていたからと想像できます。

サラ・ベルナルとの出会いをきっかけにパリで一躍流行のポスター作家となったミュシャですが、その後も挿絵制作に関わり続けます。第3章ではパリそして祖国チェコで制作された挿絵について紹介しました。初期から続く写実的な描写は、次第にデザイン的な要素が加えられるようになります。特に挿絵の集大成ともいえる『トリポリの姫君イルセ』や『主の祈り』では幻想的な挿絵が豪華な装飾と共に描かれ、物語を叙述するだけでなく装飾が物語から自立し、画家の発想に従って自由

に描写されています。

サラとの出会いはミュシャにとって幸運の始まりでしたが、19世紀の出版活動の活発な動きは同時にミュシャの制作活動を後押しします。こうした様々な幸運が重なり、ミュシャの比類なき才能はポスターだけでなく書籍の表紙や挿絵制作にも発揮されたのです。(N.N.)



サラ・ベルナルの世界

ロートレック・ミュシャ・ラリックとともに

2018年11月23日(金・祝) - 2019年3月3日(日)

19世紀末から20世紀初頭にかけて、演劇・芸術・ファッションで人々を魅了した大女優サラ・ベルナル(1840/1844-1923)。彼女は、アルフォンズ・ミュシャが一躍パリで売れっ子のデザイナーになるきっかけとなった人物です。本展覧会は、サラ・ベルナルにスポットをあてた日本初の巡回展です。彼女の芸術と栄光、そして社会的影響を写真やポスターそしてミュシャをはじめ同時代の作品とともに紹介しました。

第1章は写真や肖像画そしてドレスや身の回りの品々をとおしてサラ・ベルナルを紹介しました。サラは自分の姿を入念にプロデュースしており、プライベートを写した写真でさえも豪華な毛皮を身につけた理想とするイメージを纏っていました。舞台姿の写真では舞台そのものを撮った写真ではなく、写真スタジオで衣装を着てポーズを取り撮影しています。これらの写真はプロマイドとして劇場の売店などで売られる商品でもあり、同時にサラ自身が衣装や身振りを研究するための道具としても利用され、自宅の居間に飾られていたようです。こうした背景には19世紀に発明された写真技術があげられます。高価だった肖像写真は次第に改良が進み、名刺判の写真になると大量生産され市井の人々の生活に写真が溶け込むようになりました。

第2章では女優サラ・ベルナル出演の演劇をめぐる作品や資料を紹介しました。1862年に国立劇場コメディ=フランセーズでデビューしたサラは、オデオン座に移籍した後『リュイ・ブラス』(1872年)の女王役で評価され、ヴィクトル・ユゴーから「黄金の声」と称賛されます。その名声により、再びコメディ=フランセーズに復帰したサラは、『フェードル』(1874)『エルナニ』(1877)などで確かな成功を収め「聖なる怪物」などと称され人気を博しました。また当時としては珍しく男役を好ん

で演じ、『ロレンザッチオ』や『ハムレット』におけるサラの演技は高い評価を受けています。絶頂期のサラはミュシャや装飾工芸家ルネ・ラリックなど若手の芸術家を見だし、舞台ポスターや舞台装飾を依頼します。女優としてだけでなくいわゆるアート・ディレクターとしても才能を発揮しました。

第3章の前半ではサラとゆかりのあるラリックやミュシャをはじめロートレックなどベル・エポックに活躍した画家の作品を紹介しました。そして後半では、サラ・ベルナルの様々な側面とその栄光を「サラ・ベルナル伝説」として紹介しました。サラは女優でありながら自ら興行を起こした経営者であり、そして同時に著作を出版し彫刻を制作する時代を先駆けた多彩な女性でもありました。自らの名を冠した劇団と劇場の経営、興行主であり監督兼俳優としてサラはその地位を不動のものとし、アメリカをはじめとして海外公演も精力的に行い、国際的な大女優の先駆けともなりました。またサラは様々な奇行でも知られ、新聞や雑誌を賑わせます。彼女の姿が取り上げられたカリカチュア(戯画)、そして評伝や伝記の出版によりサラは人々の記憶にますます深く刻み込まれてゆくことになります。

唯一無二のカリスマ性を備えた女優サラ・ベルナル。彼女が与えた社会的影響、そして生き方そのものは強烈な個性を放ち、今日でもなお我々に強く語りかけてきます。(N.N.)



！ 先着プレゼント

今年もオリジナルカレンダーを制作しました。SNSサイトでミュシャ館情報を発信していた方に先着でオリジナルカレンダーをプレゼントしました。ミュシャ館のFacebookではプレゼント企画やイベントなど様々な情報を発信しています。ぜひチェックしてくださいね。



！ 「堺市駅前スマイルファミリーフェスティバル」での出張ワークショップ

2018年5月6日、堺市駅前の東雲公園にてミュシャのデザインを見本にして、消しゴムではんこを作るワークショップを開催しました。当日は家族連れのお客様を中心に多くの方にご参加いただきました。参加した子どもたちは、ミュシャはんこでハガキを書いたりノートに押したり、これらいろいろな使い方をすることを楽しみにしていました。



！ ミュシャ作品のレプリカ展示 (ミュシャ没後80周年プレ展示特別企画)

2019年2月23日(土)、24日(日) 場所: みやこめっせ(京都市)

2019年7月はアルフォンス・ミュシャの没後80周年にあたります。まずはプレ企画として、日本フラワーデザイン大賞2019において公益社団法人日本フラワーデザイナー協会の協力のもと「四つの花」シリーズのレプリカを使用したコラボレーション展示をおこないました。それぞれの作品をイメージした華やかなアレンジメントに仕上がりました。ミュシャ館では没後80年に合わせた特別展や様々なイベントを開催予定です。ぜひお楽しみにお待ちください。



！ 鑑賞教育

2015年度から堺市では美術鑑賞プログラム「わくわくびじゅつかん」を実施しています。2018年度は堺市立三国丘小学校の5年生の児童約125人を迎え、グループワークおよび個人観賞の時間を設けた鑑賞教育をおこないました。児童たちの作品鑑賞をとした自由な感想や発見したことの活発な発話から、ミュシャの作品により親しみをもちつ機会となったことが伺えました。

作品名	制作年	技法・材質	修復後寸法(タテ×ヨコ)	処置内容	委託先
《ジョブ(1896年)》	1896年	リトグラフ、紙	660×459	乾式清掃、裏打ちの除去、水洗、再裏打ち、中性紙ブックマット新調など	山領絵画修復工房
《『ハースト・インターナショナル』誌表紙》	1922年	紙に印刷(雑誌)	350×251	テープ除去、前補の除去、全体の乾式洗浄、全体の軽い水洗、欠損部に補紙および補彩、極薄の紙による裏打ちなど	山領絵画修復工房
《スラヴの民族衣装を着た少女: 《スラヴ叙事詩》の習作》	1919年	油彩、板	498×498	割れ部分の剥落止め、充填、乾式洗浄、補彩、額改良、裏板の交換など	森絵画保存修復工房

※作品寸法の単位はmm.

堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市立文化館)

観覧料 一般 500円 高校・大学生 300円 小・中学生 100円
2019年4月16日現在

*小学生未満・堺市にお住いの65歳以上・障がい者手帳をお持ちの方と介助者は無料 *20人以上100人未満の団体は2割引

開館時間 9時30分～17時15分(入館は16時30分まで)

休館日 月曜日(休日の場合は開館)、休日の翌日(翌日が土・日・休日の場合は開館)
年末年始、展示替期間

交通 JR阪和線堺市下車徒歩約3分
JR快速にて・大阪から約25分・天王寺から約10分・和歌山から約60分・関西国際空港から約40分

590-0014 大阪府堺市堺区田出井町1-2-200 ベルマーゼ堺式番館

TEL:072-222-5533 FAX:072-222-6833

http://mucha.sakai-bunshin.com 公式ウェブサイト





左から

- 《宵の明星:四つの星》
- 《月:四つの星》
- 《北極星:四つの星》
- 《明けの明星:四つの星》

1902年 リトグラフ、紙
863×348mm

本作は4点一組の連作で、「宵の明星」、「月」、「北極星」、「明けの明星」をそれぞれ女性の擬人像で表している。1887年からパリに絵を学びに来ていたミュシャは、1895年にサラ・ベルナルの演劇ポスター《ジスモンダ》をきっかけに、以後売れっ子のデザイナーとしてパリで活躍し、背景の花やデザインに彩られ、長い裾のドレスを身にまとった女神のような女性像を作品に数多く登場させた。

本作の女性が身に着けている衣装やアクセサリはエキゾチックなデザインで、女性のポーズは動きがあるもの、そして静かに佇むもの両方がある。さらに作品の外枠には曲線的な植物の模様も加えられ、パリ時代のミュシャらしいデザインが見られる。しかし本作では星の光を強調するためなのか、パリ時代の作品の中では珍しく全体的に暗く抑えられた色合いで、女性の背景の余白はシンプルな印象である。後年ミュシャはチェコに帰ってスラヴ民族の歴史大作《スラヴ叙事詩》に取り組むことになるが、光を効果的に使い、明暗によって画面に強弱をつける点は後の大作を予見しているようでもある。(Y.K.)



《メディア》

1898年
リトグラフ、紙
2075×765mm

ミュシャはサラ・ベルナル主演の演劇ポスター《ジスモンダ》をきっかけにサラと6年間の制作契約を結んだ。本作はミュシャがサラのために制作した5番目の演劇ポスターである。

1898年10月28日にルネサンス座で初演を迎えた『メディア』は、古代ギリシャの三大悲劇詩人の一人であるエウリピデスの『メディア』をもとに書かれた戯曲である。コルキスの王女メディアは夫イアソンの裏切りを知り、コリントスの王と夫の愛人である王女を殺害、さらには自身の幼い二人の我が子を手にかけてしまう。ポスターには、目を見開いたメディアが血塗られた短剣を手に死体となった子供の前に立つ姿が描かれている。我が子を殺害することで夫に復讐を果たす緊迫した場面である。この戯曲を脚色したフランスの詩人カチュール・マンデスは、想像を絶するメディアの行動を野蛮な人間のうっ積した情念から夫に裏切られた女性の深い悲しみと怒りに焦点をあて従来とは違った解釈を施した。メディアは世紀末に流行した「ファム・ファタル(男を破滅させる女)」を体現した姿で描かれているのである。

ポスター上部にはビザンティン風のモザイク模様や演劇タイトル「MEDEE」の両脇にみられるパルメット模様(シュロの葉を扇形に開いた植物文様。古代エジプトに端を発し、ギリシャで広く用いられた)が装飾されている。おそらくこの演劇がギリシャを題材とし、舞台としているためであろう。(N.N.)



《蛇のブレスレットと指輪》

1899年
金、エナメル、オパール、ダイヤモンド
275×68mm

ミュシャは演劇ポスター《メディア》の中で女王メディアに蛇をかたどった腕輪を描いた。このモチーフをとっても気に入った女優サラ・ベルナルは、宝飾商ジョルジュ・フーケに制作を依頼する。本作品は、

ミュシャとフーケが共作した宝飾品である。この時期、ミュシャはフーケと協働し、多くの宝飾品を残している。フーケ宝飾店は1901年にパリ、ロワイヤル通りに開店、内装そして外装をミュシャに依頼し、アール・ヌーヴォー様式の豪華な装飾が施された(1923年に取り壊し。現在、カルナヴァレ博物館に一部収蔵)。

全体に金、蛇の頭部にはオパールそして円形の意匠にダイヤモンドが施され豪華な仕上がりとなっている。胴体のうろこの装飾は細部まで繊細に作りこまれており、さらにしっぽ部分はしなやかに動かすことが可能である。加えてオパールの特徴である色彩の変化は一層蛇のモチーフに妖しい輝きを纏わせ、女王メディアに相応しい印象を添えている。実際、舞台上で小道具として着用されたようだ。(N.N.)

講演会 ミュシャとその時代

2018年4月28日(土) 14:00~15:15 講師: 新谷式子氏(あべのハルカス美術館学芸員)

ミュシャの画業における歴史画家としての側面の重要性について、また同時代の印象派や象徴派といった芸術様式にも触れながら、ミュシャがそれらの芸術潮流をどう捉えていたのかという視点からお話いただきました。当日は定員を超えるご参加と、質疑では多くの方々から質問があり、盛況のうちに幕を閉じました。



手ぬぐいで作るヘアゴムワークショップ

2018年6月2日(土) ①10:00~11:00 ②11:15~12:15
③13:15~14:15 ④14:30~15:30
講師: 藤原泉氏(株式会社ナカニ)



郷の伝統工芸「^{シマツルギ}注染」×アルフォンソ・ミュシャ。ワークショップでは、注染の手ぬぐいを使ってミュシャの作品のモチーフをイメージしたボンボンヘアゴム作りを体験いただきました。注染の技術で染められた手ぬぐいはどれも色鮮やか。年齢問わず皆さまの楽しむ姿が印象的でした。

ミュシャコレクター尾形氏とめぐるミュージアムトーク

2018年7月21日(土) 14:00~15:00

尾形寿行氏はアルフォンソ・ミュシャの作品を所蔵する日本有数の個人コレクター。「物語を彩るミュシャと挿絵の世界」展では尾形氏が所蔵されているミュシャ作品を多数お借りして展示を行いました。そのご縁もあり尾形氏をお招きしたミュージアムトークでは、幅広い知識・内容で自身のコレクションから収集の経緯まで、展示されている作品を鑑賞しながらお話いただきました。



朗読会『白い象の伝説』

2018年10月13日(土) 14:00~15:00

朗読: 千代真由美氏(「きいてもらえる声になる!」朗読教室主宰)

ミュシャが挿絵を手がけた書籍『白い象の伝説』。白い象がたどる数奇な運命を描いたこの物語は、全編にわたりミュシャの精緻な挿絵が物語を彩っています。物語のクライマックスを取り上げ、民族調の音楽を背景に日本語に翻訳された物語の朗読会を開催しました。参加された皆さまは千代氏の迫真の語りに想像の翼を広げ、すっかり魅了されているようでした。



リースワークショップ

2019年1月27日(日) ①10:00~12:00 ②15:00~17:00
講師: 新屋由賀里氏



アルフォンソ・ミュシャが描いたポスター《サラ・ベルナル》に描かれるサラの花冠をイメージしたリース作りをしました。使用した花材はアーティフィシャルフラワーといって、とても精巧につくられた造花です。大輪のユリの花を山帰来(さんきらい)のリースに差し、ベリーやアイビーで彩りを添えます。お花の配置、そして微妙な向きでリースの表情にそれぞれ違った趣が生まれました。新屋先生はお花の由来や花言葉もご説明くださいました。参加された皆さまのリースはどれも表情豊かで素敵な仕上がりとりました。

キャンドルワークショップ

2018年12月22日(土)
①10:00~11:30 ②13:00~14:30
講師: 柴田阿矢氏(225candle教室主宰)



アルフォンソ・ミュシャが描いた演劇ポスター《ジスモンダ》をイメージしたキャンドル作りを行いました。講師の柴田先生は普段から教室で様々なキャンドル作りを教えていらっしゃいます。今回作ったキャンドルは、小瓶に好みのドライフラワーをピンセットで配置し、最後に口ウを流し込みます。参加された皆さまの個性によって鮮やかに彩られたキャンドルは、置物としても素敵ですね。

講演会 聖なる怪物サラ・ベルナル:女優の歴史と大衆メディア

2019年2月17日(日) 14:00~15:30 講師: 白田由樹氏(大阪市立大学准教授)

アルフォンソ・ミュシャが有名になるきっかけとなった女優サラ・ベルナル。講演会では彼女の出演した劇を初期から振り返り、当時のフランスの政治や文化など時代背景と合わせてお話いただきました。中でも、貴重な音源として文豪ヴィクトル・ユゴーに「黄金の声」といわれたサラ本人の肉声を流し皆さんにお届けしました。壮大な女優人生を謳歌したサラ・ベルナルの話に参加された皆さまは大変興味深そうにされていました。

